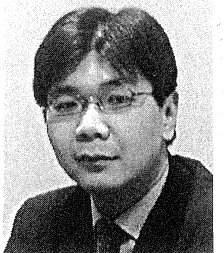


友情を育むように……

オーケストラと街がつくる地域文化

関西フィルハーモニー
管弦楽団理事・事務局長
西濱秀樹



指揮者体験コーナーでのひとコマ

“危機”的状況は、新たな地平を開く原動力を生む”。よく言われる言葉です。関西フィルハーモニー管弦楽団（以下、関西フィル）の地域密着事業，“コミュニティーコンサート”が生まれたきっかけは、とても現実的なことでした。当時の事務局長から、「楽団の練習場を用いて、何かできないか？」という課題が与えられたのです。楽団員が吹奏楽を指導したり、ミニコンサートを開いていましたが、楽団主催公演実績はゼロ。しかし、楽団員たちの思いをもっと大きな力に結実させるコンサートを実現したいと強く思いました。

1998年の秋、不況の真ただ中で危機的状況にある楽団の将来像を思案していたとき、故・武満徹氏の「オーケストラは都市の公園のような存在である」という言葉が浮かびました。この言葉を実現したとき、オーケストラの未来が切り開かれる気がしました。

定期演奏会を行うのはザ・シンフォニーホールです。しかし、楽団は多くの時間を練習場で費やします。本拠地は、この練習場ともいえます。日本のオーケストラは、その成立の歴史から、聴衆・都市に支えられるというよりも、音楽家の意思が先行しています。ある意味で根なし草といえるでしょう。大阪市港区弁天町。下町の薫りと再開された高層建築が混在するこの街の人々に、「関西フィルは私たちの誇り」と思っていただけたとき、オーケストラが根をもち、大きな幹を育てることができると確信しました。

地域とのきずなを目指す意味で名称は「コミュニティーコンサート」に設定。料金は映画より安く大人1,500円、学生500円に設定。聴衆と間近に触れ合うかっこうの機会を生かし、通常よりも絞った室内楽団規模でアンサンブルを磨くことも目指しました（現在では、ほぼ2管編成での演奏に成長）。公演では指揮者・楽員のお話も交えコ

ミュニケーションを重視。司会は私が務め、出番のない楽員も場内整理を手伝うなどの“手作り”スタイルでコミュニティーコンサートを作り上げていったのです。

私はまず、地域の自治会・子ども会の皆さんのもとを訪ね、厳しい叱咤激励を受けました。「関西フィルが弁天町に本拠地を移して5年。その間何もなくて、いまさらなんだ！ただ、楽団がそういう姿勢なら、この街の文化のために喜んで協力しよう」。街の方々の楽団への期待を実感した瞬間でした。チラシを張ってくださるマンションの管理人さん。回覧板で連絡してくれる喫茶店のマスター。全面的に誌面協力してくれたコミュニティー雑誌。

初のコミュニティーコンサートは、定員200名に対して申込みは400名を超えて、大成功のスタートを切りました。「弁天町に引っ越ししてきて良かった。関西フィルに出会えてうれしい」と話してくれたご夫婦。「足が悪くてコンサートに行けなかったけど、ここなら来れる。楽しみが増えました」と手紙を下さった80歳の女性。“街の顔”への第一歩を踏みだした私たちはここで学んだスタイルを西日本各地で展開していくことになります。

そこで地域の音楽家、聴衆、情熱ある会館の方々と出会い、私たちの地域密着スタイルは、さらなる広がりをもっていきます。（次回へ続く）

ホールから駅へ通じる一本道。そこに木々を揺らすように鳴り響くトランペットの音。音楽に迎えられたお客様がホール前に作られたオープンカフェでゆったりとくつろぎながら、コンサートの開場を待っている……まるで海外の野外フェスティバルのような風景が関西フィルハーモニー管弦楽団（以下、関西フィル）の野洲（滋賀）公演では毎年繰り広げられています。

1998年夏、関西フィルは初めて滋賀での自主公演を、この野洲で開催しました。前回、この誌面でお伝えしたように、「オーケストラ＝地域文化の牽引」を打ち出し、地域の方々に愛され、支えられて、文化のすそ野を広げることによってオーケストラの使命があるとの活動方針を打ち出した当楽団が、最初の拠点として展開を決意したのが滋賀だったのです。この事業実現には、さまざまなご縁がきっかけとなっています。まず、当楽団の年末の自主公演「リラックスコンサート」（心と身体を音楽とアロマの薫りでいやしましょう、という趣旨）に滋賀の文化事業をリードする企業の方々が訪れてくださいました。「これを、滋賀でやらないか」とのお話が持ち上がり、会場選択へと進みました。野洲文化ホールは、滋賀県でも歴史の古いクラシックに適した音響効果を誇るホール。それだけでなく、重要な要素がありました。それは、周辺に続々とオープンするクラシック専用ホール。さまざまな困難の中で、もう一度、“滋賀県初のクラシックホール”として伝統を再生する思い。



野洲公演

地域の皆さまが“集う場所”としてホールを活性化する思いが重要だったのです。話し

合いを重ねる中で、楽団・地元企業・ホールの三者共催というかたちで、1998年夏に、初開催となりました。

順風満帆の船出ではありませんでした。ホールのロケーションを生かし、オープンカフェの設置。植物を会場に配し、その中でお客様を迎えるロビーコンサートを実施する、もちろんコンサートではトークを取り入れ、会場との一体感を醸成する、さまざまな試みを実施しての初年度の動員は600名。当時の同ホールの動員率としては優秀ではありましたが、完売には遠い数字でした。2000年夏、当楽団正指揮者に就任した藤岡幸夫を起用するも、状況は大きく変わりませんでした。積み重なる赤字。「打ち切り」の文字が現実味を帯びる中、新たな光明が見えました。文化庁の重点支援事業に採択されたのです。第2段階がスタートしました。

それは、「このイベントを野洲の恒例行事として位置づけ、街全体で盛り上げる」というものでした。商工会議所新年会での、主催企業社長スピーチを皮切りに、新たな行動が始まりました。春、指揮者の藤岡が街を訪れ町長と会談、広報誌で大きく取り上げられました。藤岡は地元ラジオなどの各種メディアにも登場、雰囲気盛り上げます。私自身も、司会をしていた関係で、地元商店街・地元音楽家協会などにあいさつ回りをしました。ホールの方々の熱意は街の人々を動かし、結果、900名の動員につながったのです。その後、地元吹奏楽団・合唱団、滋賀出身アーティストとの共演を盛り込み、ますます“街のコンサート”に成長した同公演は、今では毎年完売の盛況となり、滋賀県下で4か所開催につながりました。“文化は街を活性化するか”を問いながら、同様の流れを兵庫、和歌山、京都でも続けています。

関西フィルハーモニー
管弦楽団理事・事務局長

西濱秀樹

